病防第１３４号
平成２９年３月６日

各関係機関長　様

熊本県病害虫防除所長

イチゴにおけるアザミウマ類の防除対策（技術情報第１３号）について（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、防除指導の参考としてご活用下さい。

記

今作は、平年に比べアザミウマ類の発生が多くなっていますので、ほ場を確認し、発生が見られる場合は防除を行いましょう。

２月に県下のイチゴ主要産地で実施した巡回調査では、アザミウマ類の寄生株率が10.7%（平年0.5%）で平年比多の発生であり（図１）、今後イチゴにおける本虫の発生に注意が必要である。

１　対象害虫の特徴等

イチゴに寄生するアザミウマ類は、主にヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマである。これらは、多くの植物に寄生し、産卵に花粉が必要なため花への寄生が多いが、虫自体が小さく目立たないため発生に気づかないこともある。さらに、３月以降は気温が上がり、施設内での発生が増加するとともに施設外からの飛び込みも多くなるため、果実を加害し被害果を発生させる。

アザミウマ類は、多発生し様々な生育ステージ（図２）が混在すると防除が困難となるため、以下の防除対策を実施する。

２　防除対策

（１）早期発見（各ほ場共通）

１）施設内に青色粘着トラップを設置し、成虫の発生を確認する。

２）開花中の花を白紙上で軽く叩くか、軽く息を吹きかけ、成幼虫の寄生を確認する。

（２）耕種的・物理的防除（各ほ場共通）

１）施設内および周辺の雑草は、重要な発生源となるので、開花する前に除草する。また、施設内の観賞用の花き類も撤去する。

２）施設内に青色粘着トラップを設置し、アザミウマ類の密度を低下させる。

（３）天敵利用ほ場の場合

ハダニ類対策で天敵（カブリダニ類）を放飼したほ場で発生している場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。ただし、成虫の発生が多い場合は、アザミウマ類の防除を優先し、アザミウマ類成虫に効果の高い薬剤を選択する（下記（４)を参照）。その場合、天敵にも大きく影響するため、散布後のハダニ類の増加に注意する。

（４）天敵を利用していないほ場の場合

１）発生初期は、幼虫に効果のある剤（昆虫成長制御剤等）を使用する。発生が増加し、成虫の数が増えたら、成虫に効果の高い剤（スピノシン系剤※）を中心に使用する。

２）多発生した場合は、薬剤の散布間隔を短くし（約５日）、異なる薬剤を輪番で複数回散布する。

3）薬剤防除にあたっては、訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。
※イチゴで登録のある薬剤は、ディアナＳＣおよびスピノエース顆粒水和剤である（平成29年３月６日現在）。

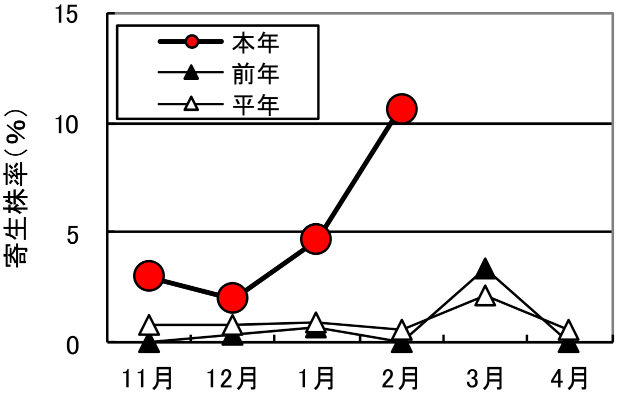

図１　アザミウマ類の寄生株率の推移

写真１　ミカンキイロアザミウマ成虫

写真２　花へのアザミウマ類寄生の様子

写真３　被害果実表面の様子

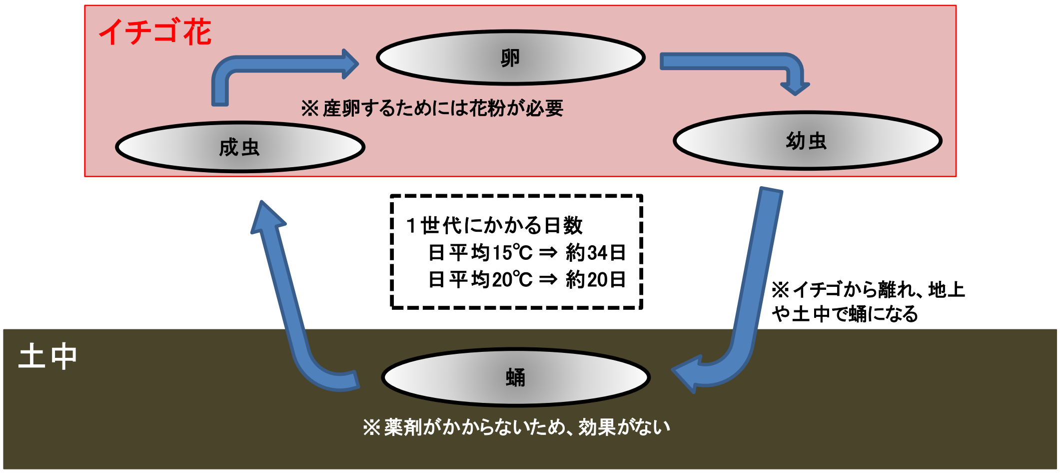

図２　イチゴにおけるアザミウマ類の生活環

熊本県病害虫防除所
（熊本県農業研究センター　生産環境研究所
病害虫研究室　予察指導係）
担当：児玉　　TEL　096-248-6490